



外 観



1 階ロビー



2階嵐溪

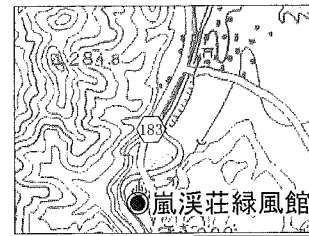


3階紫藤

2-3 嵐溪荘緑風館

三条市長野

昭和時代戦前期建築、昭和 30(1955) 年頃移築



1 沿革

嵐溪荘は三条市長野の長野温泉に位置する一軒宿で、2代前の大竹保吉が大正時代末、夢のお告げからこの地において鉱泉を掘り当てて、昭和2(1927)年に湯治場を開いたのが始まりという。建物は平成24(2012)年8月国登録有形文化財とされた。

2 建物の概要

・配置と形式、規模

長野温泉は下田を東西に横断する国道289号を名勝八木ヶ鼻で分岐し守門登山口へ向かう県道183号線沿の守門川右岸に位置する。かつて旧県道が左岸にあり、送迎では対岸で車を降り、吊り橋を渡って旅館へたどり着く趣向であった。敷地は川沿いの長さ150m、幅100m程で、建物群は上流の南側を正面として立つ。旅館の建物は本館となる緑風館のほか、新館の溪流館、宴会場、外湯などから構成される。

緑風館の規模は木造3階建てで総間口は9間半、奥行5間半である。建物は平入の形式で棟位置を前後にずらして東棟が西棟より1間前にあり、両者の中央正面に角屋となる中央棟を接続させる。いずれも入母屋造桧瓦葺の形式で、西棟と中央棟角に1間四方の広さを有する鉄板葺の望楼が3階屋根上に乗る。なお、外観南側は鯔子下見板張とするが、西棟西側壁は鯔子を用いず、いわゆるドイツ下見の形式とする。

・平面

玄関は鉄板葺入母屋造妻入のものが東棟南側に取り付く。1階東棟は下足を履き替える玄関、売店、階段で、中央棟部分はロビー、フロント、西棟部分にはラウンジが配され、背面の溪流館へ接続することとなる。2階は東側の階段から上ると、東棟に15帖で「嵐溪」、中央棟10帖

の「阡蒼」が続座敷として配される。西棟は6帖の「若草」、8帖の「千草」が続座敷としてあり、各部屋南側と「阡蒼」西側に4尺巾の廊下を配する。3階は東棟が10帖の「菊」で、裏側に2帖の控えの間を持つ。中央棟が8帖と6帖の続座敷を1室とした「蔦」、西棟は6帖の「紫藤」、8帖の「白藤」として、「蔦」西側と「紫藤」「白藤」南側を4尺の廊下とする。望楼への入り口は「紫藤」東側の廊下にあるが、梯子によらねば登ることはできない。望楼の室内は板張りで、内部の仕上はなく、四方に嵌め殺しのガラス窓を開く。

なお、各客室は、床の間、棚、書院を配する純和風の赴きとなる。室内意匠では特に床、棚、書院などからなる座敷飾りの配置に心を砕き、更に窓や欄間には各部屋で異なる意匠を配することで、部屋ごとの個性を引き出すことを試みている。

・構造

全体が木造3階建てで一部に下屋を回し2階で納める部分がある。3階の小屋組はいずれも京呂の和小屋組で、主要な隅部に火打梁を配する。東棟と西棟はいずれも梁行は3間で納め東棟を前に1間ずらすものである。中央棟は東棟の前方に取り付く配置となる。なお、小屋組からは2種類の番付が見出された。1つは東棟及び西棟を一体に記す漢数字による組合せ番付である。東棟南東隅から西に半間程入った入母屋妻を受ける梁南側の母屋束を基点としていた。一方、中央棟は東棟から突出する部分のみ別の50音と数字による組合せ番付で、中央棟入母屋妻を受ける妻梁西側の母屋束を基点である「アノ一」とするようであった。なお、西棟小屋組材においては材の一部を削って番付が記されていた。後述のように本建物は移築を受けて

いるため、この番付は移築に際してのものとするのが妥当であろう。

3 建築年代及び復原考察

・建築年代

緑風館は、かつて燕駅前にあった小川屋旅館の建物を移築したものとされる。小川屋はもと、明治時代に新潟との蒸気船により開かれた中ノ口川の燕における河港で業を興した。一方、大正11(1922)年に現弥彦線の燕駅が開業し、大正15(1926)年には一ノ木戸駅(現在の東三条駅)まで延伸された。更に当時の新潟電鉄線が昭和8(1933)年に燕駅へ乗り入れることにより人の流れは鉄道中心となり、これらを機に小川屋旅館は燕駅前に移転して建物を新築したという。しかし、これも昭和28(1953)年頃に廃業し、建物を下田村長野(当時)の地へ昭和30(1955)年頃に移したものが嵐溪荘緑風館である。

燕駅前における小川屋旅館の姿は数々の古写真に残される。これらによれば旅館の所在地は現在の燕市燕2828番地付近、燕駅前南側60m程の場所に北面して立っていた。

・建物の復原

まずは建物が下田村に移築された際の復原とその後の変遷を追いたい。

燕駅前の小川屋旅館と現状の嵐溪荘緑風館を比べると両者はよく類似するものの、両建物を詳細に検討すると以下の部分において相違が確認される。玄関は現状で入母屋形式のものが東棟南側に取り付くが、古写真を見ると同形式の玄関は西棟南正面側に取り付く。小川屋時代、旅館建物は燕駅の南口に相対し駅前広場南西角に立地していたが、この位置が駅からは近く、客を迎え入れるために適した場所であった。下田村への移築を機に、玄関入口は東側へ移されたとも考えられる。

また、東棟3階下屋は現状で東棟2階下屋上に乗る形となる。燕駅前における写真では、この3階下屋は存在せず、後の増築と判断できる。

聞き取りによれば、平成17(2005)年頃に手を加えたとのことであった。なお、東棟2階下屋部分は小川屋時代の写真にも見ることができ、当初からの形式と考えることができる。平面を見ると2階、3階は大きな改造は少ない。但し、移築後も中央棟と西棟の間には階段のあったことが現在も残る階段親柱などから判断できる。背面の溪流館増築に伴い撤去を受けたものであろう。1階は移築以後も大きく改造を受けた。現在、西棟ラウンジ「ひめさゆり」は天井がこの部分だけ周囲とは異なり長押が西側に残る。聞き取りによればこの部分は「梅」の間とする客室がかつてあり、裏側は物置であったという。そして、この旧「梅」東側が廊下で、傍らに上述した階段があり、奥に便所などがあったという。中央棟ロビーはかつて応接室として用いられ、売店は同じ位置にあったという。

次いで建物が当初、燕駅前に建てられた時期における復原を行いたい。玄関は既に述べたように、当初は西棟に取り付くが、そのため西棟南側と現状で玄関が取り付く中央棟西側の柱間装置が改変を受けたことになる。また、2階から3階に上る階段では半間の位置に立つ柱に手摺を受ける痕跡が確認されたため、当初、この階段は半間幅であった可能性を指摘できる。

4 まとめ

嵐溪荘緑風館は昭和時代戦前期、弥彦線燕駅前に建築された小川屋旅館の建物を昭和30(1955)年頃に下田の地へ移築したものである。移築に際し、玄関の位置が変わり、後に3階東棟下屋の改造があった。内部でも階段及び1階客室の撤去などが見られるものの、戦前期に遡る木造3階建てとする外観及び各客室の姿はよく旧状を伝え、地域の交通史を考える上でも貴重である。また、和室となる客室は各部屋で座敷飾り、窓や欄間彫刻に独自の配置と材料、意匠を用いる多彩なもので、昭和時代初期における匠の技を部屋ごとに堪能できる点が見どころである。



遠景 守門川と嵐溪荘 南より



外観正面 南東より



2階への階段 北東より



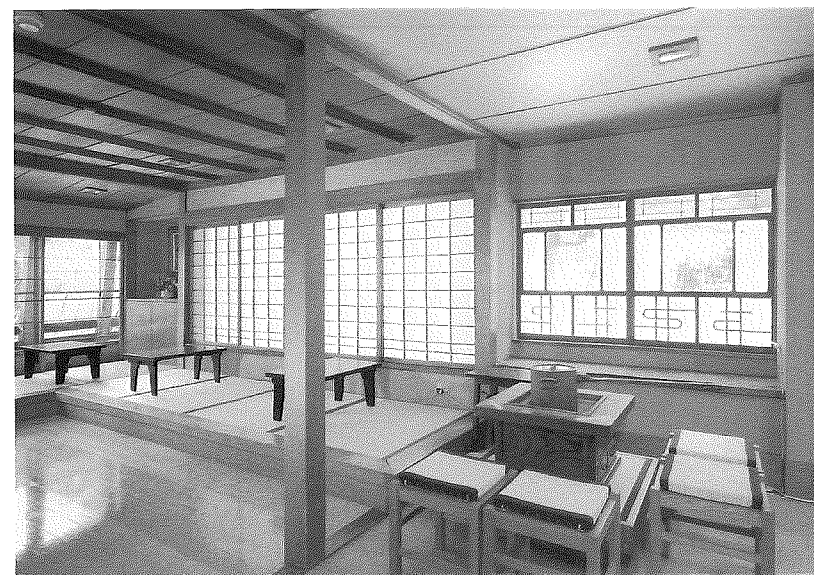
外観
南西より



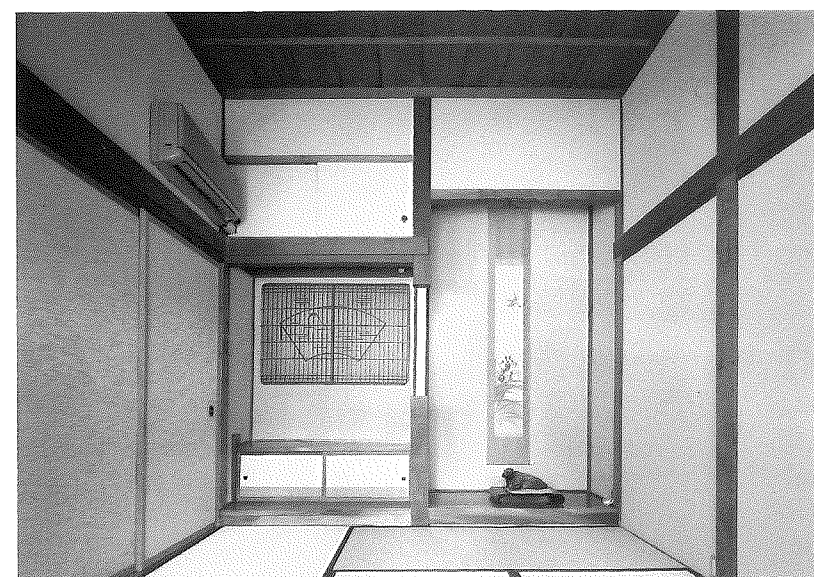
外観
南東より



望楼*
北西より



1階 ラウンジ
北東より



2階 若草
南より



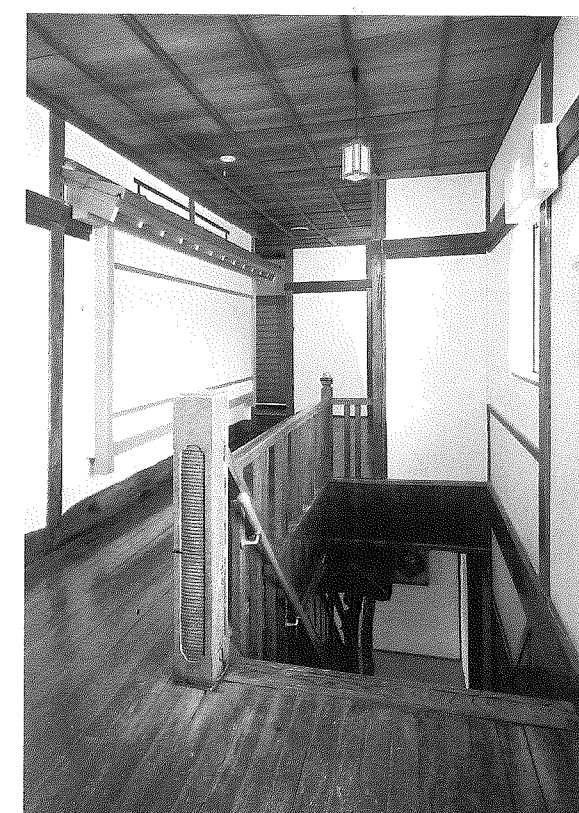
2階 若草・千草
南東より



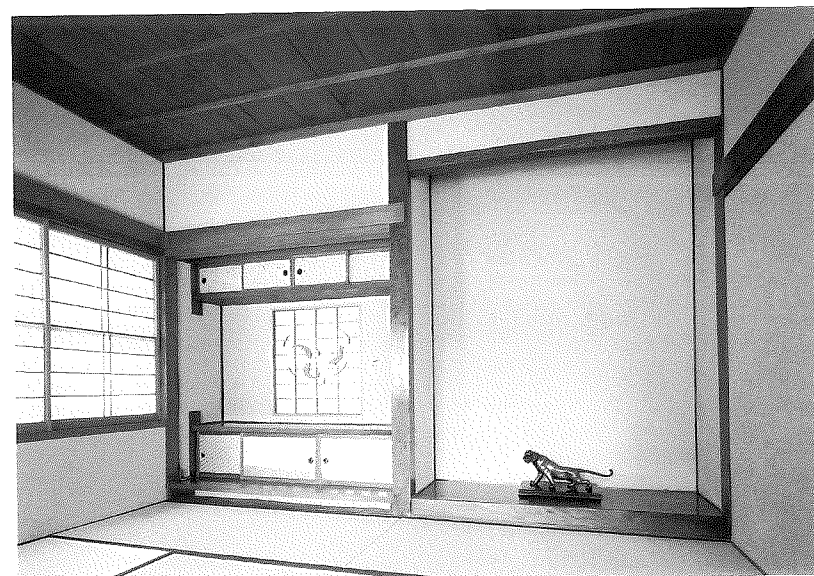
2階 嵐溪 阡蒼西より



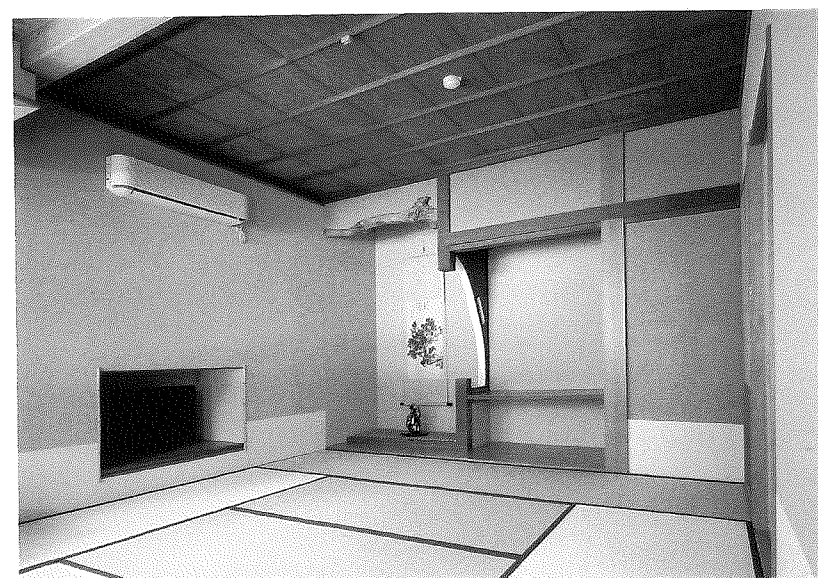
2階 廊下 北より



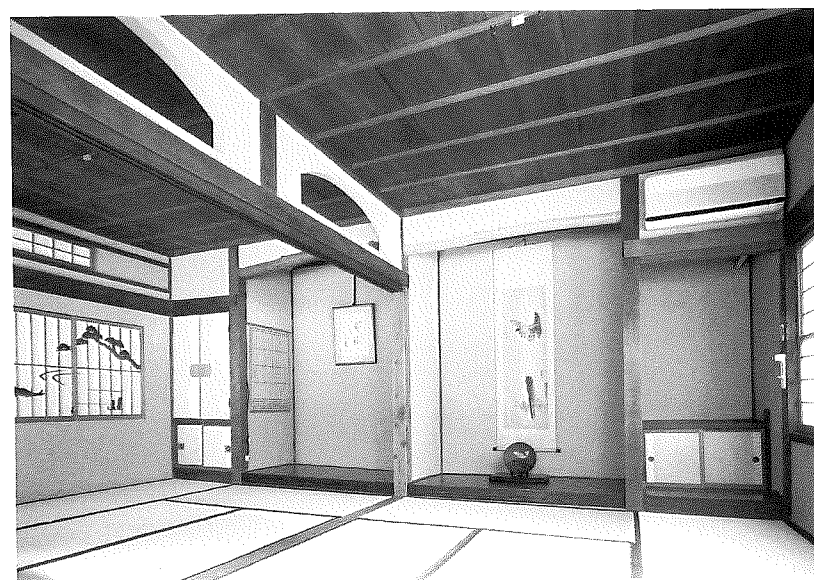
3階への階段 東より



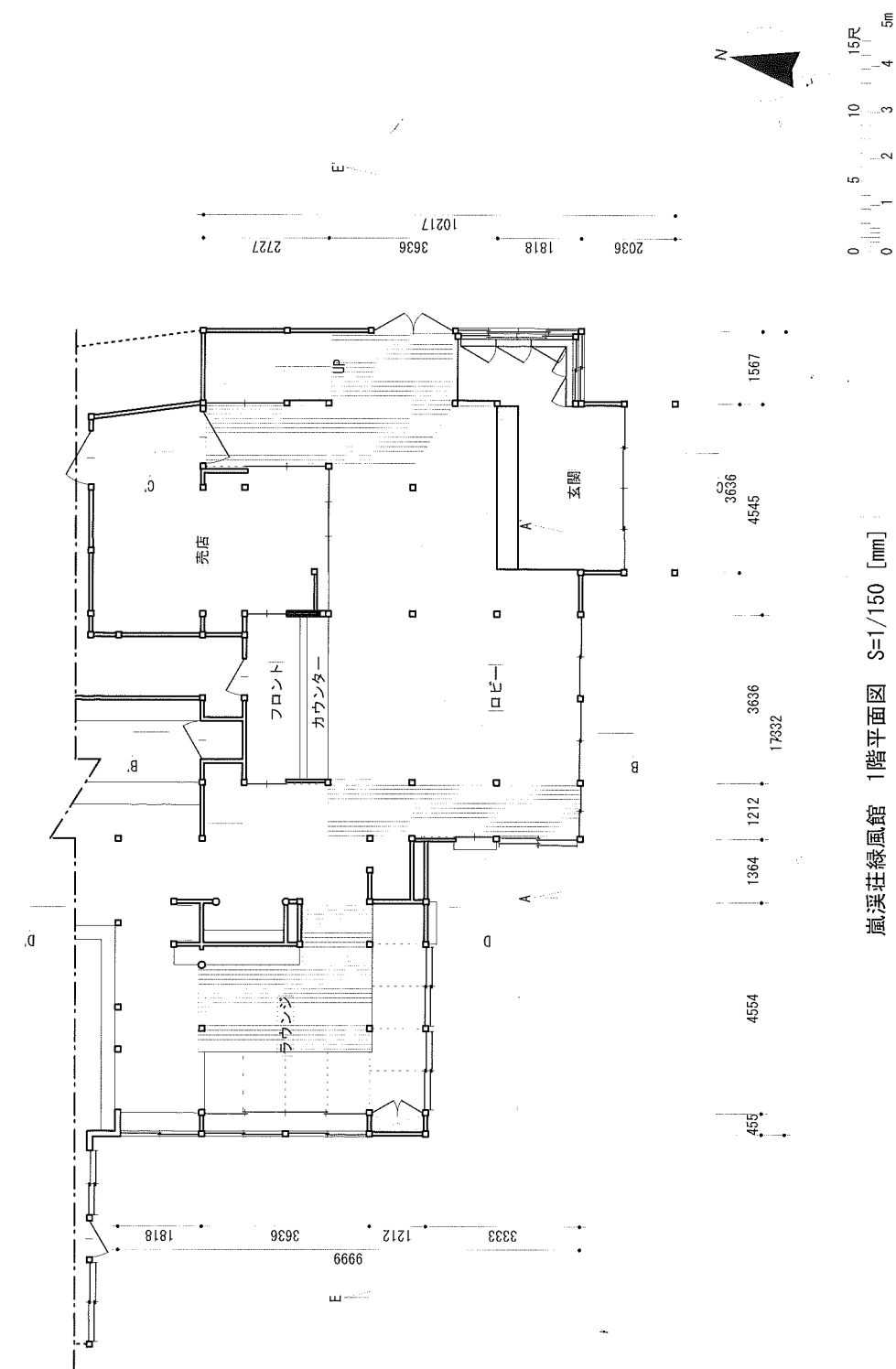
3階 白藤
南東より

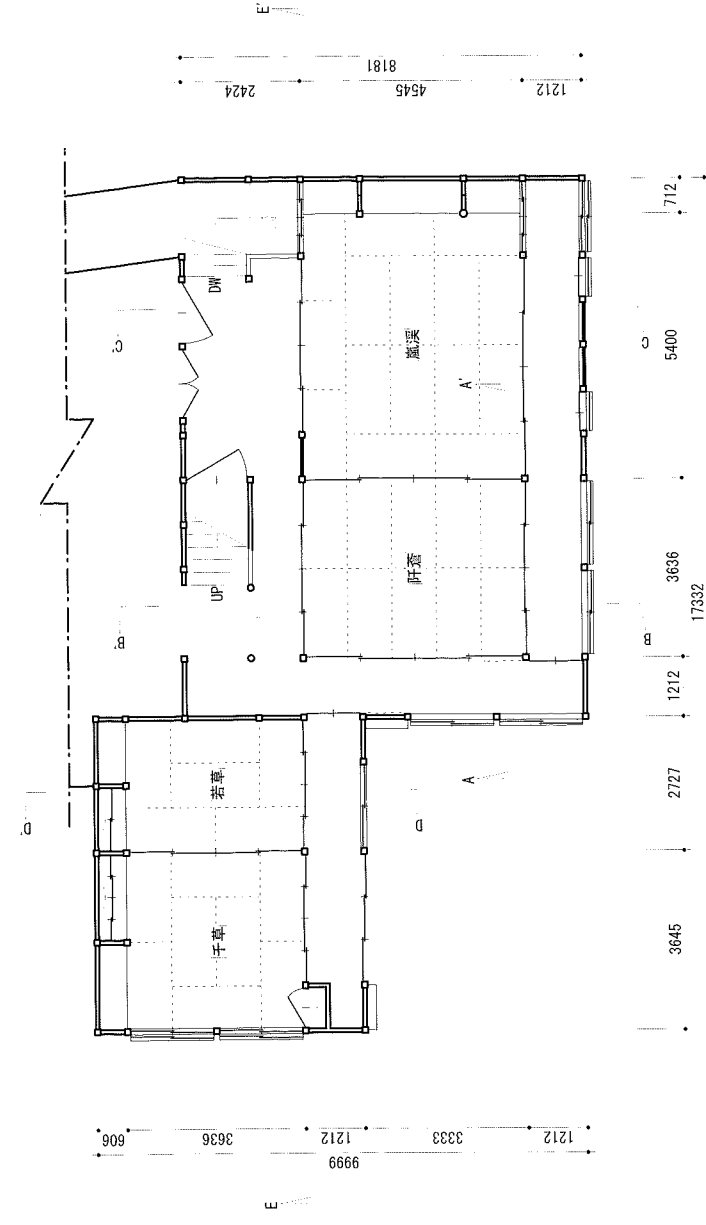


3階 菊
北東より

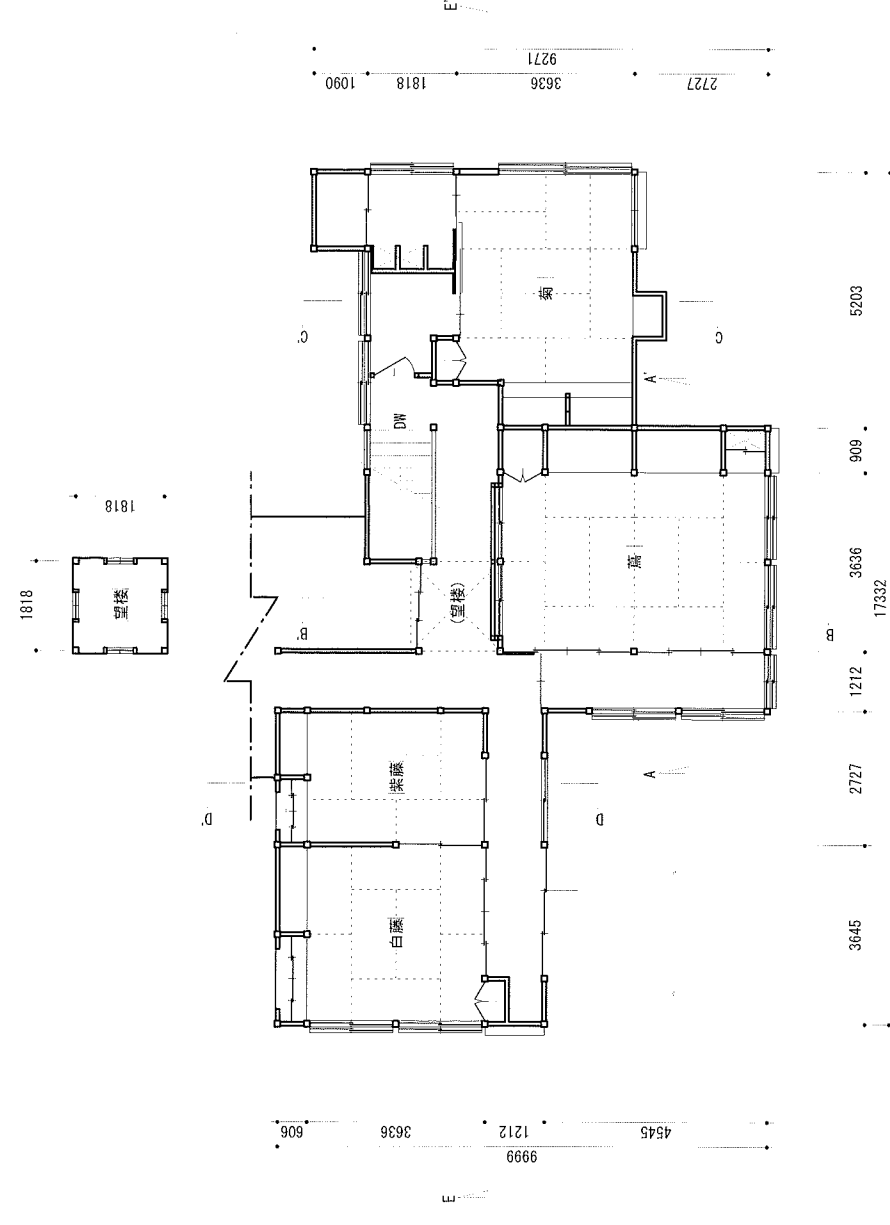


3階 蔦
南西より

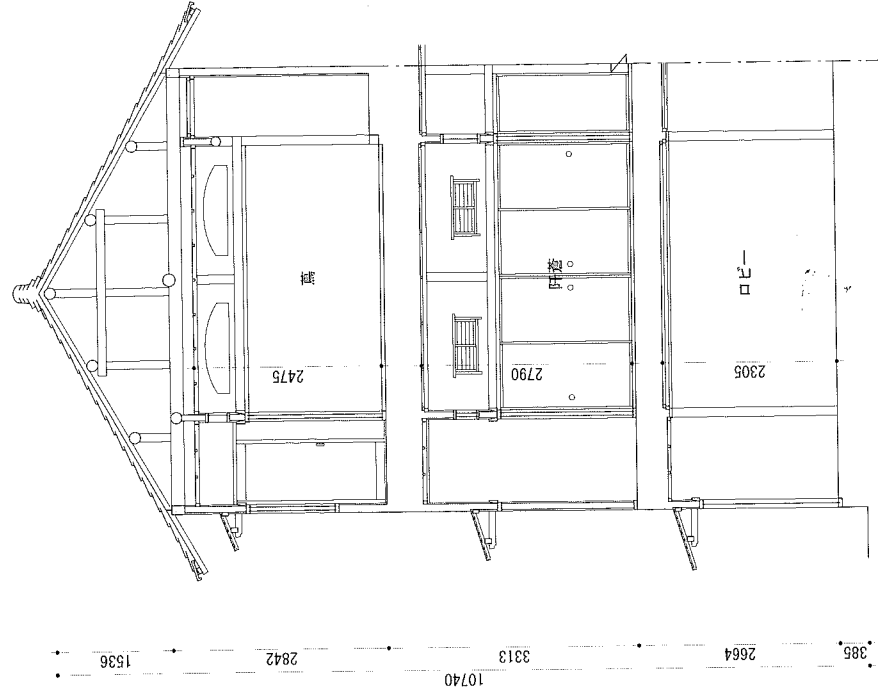




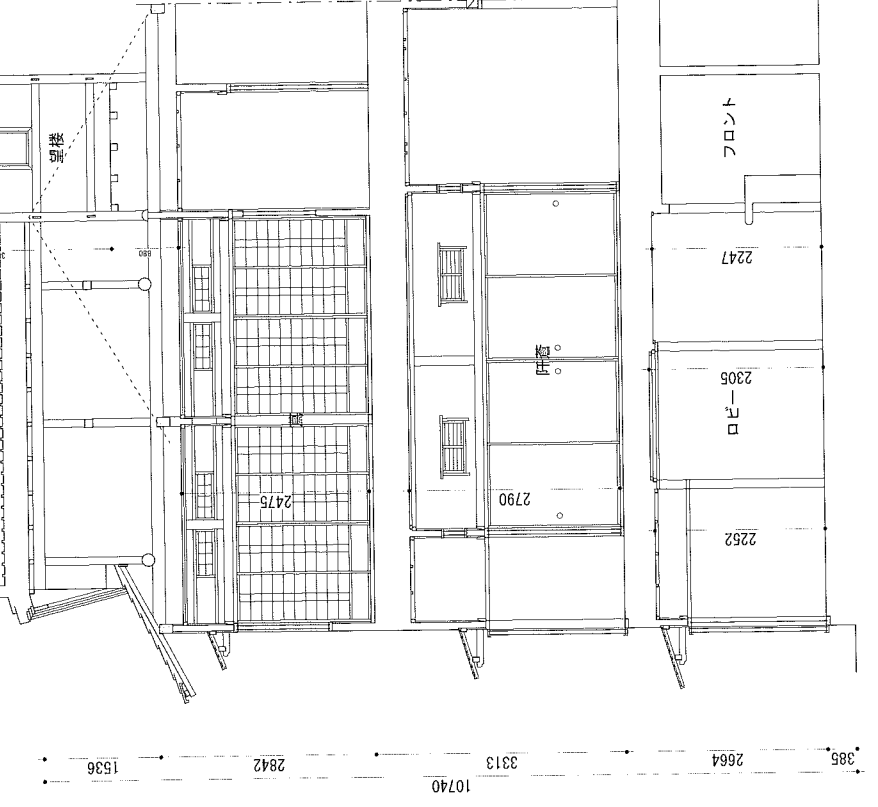
嵐溪莊綠風館 2階平面図 S=1/150 [mm]



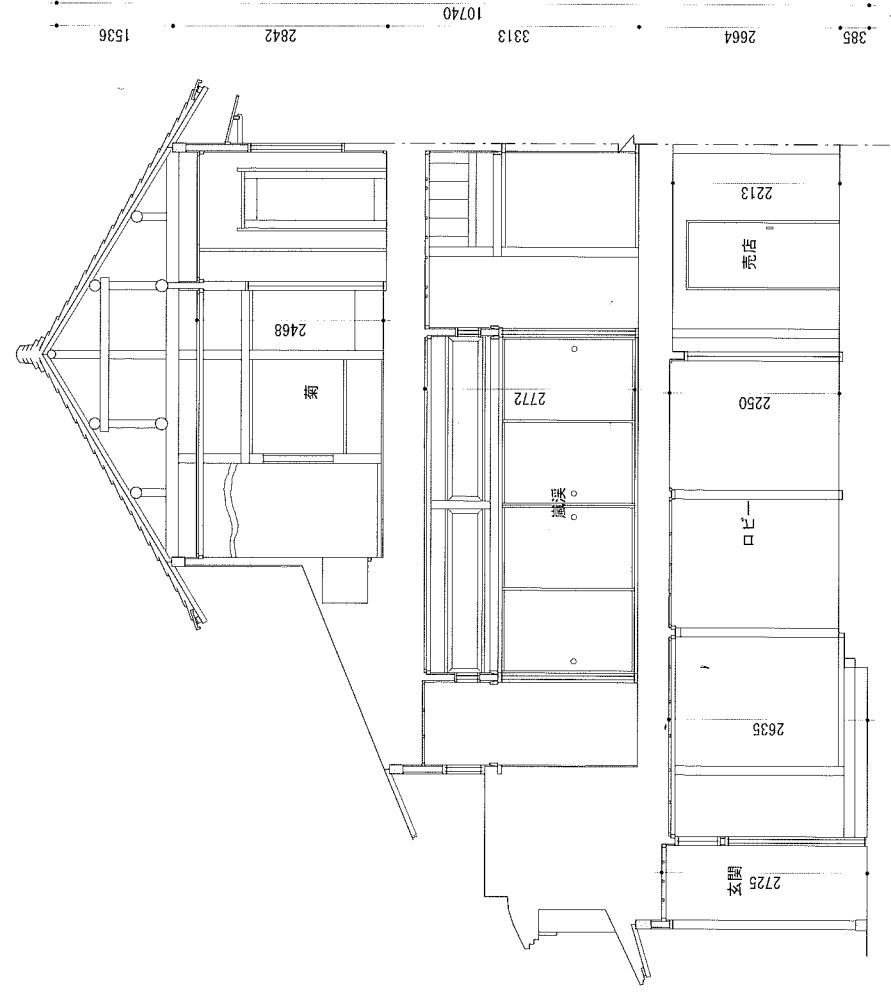
嵐溪莊綠風館 3階平面図 S=1/150 [mm]



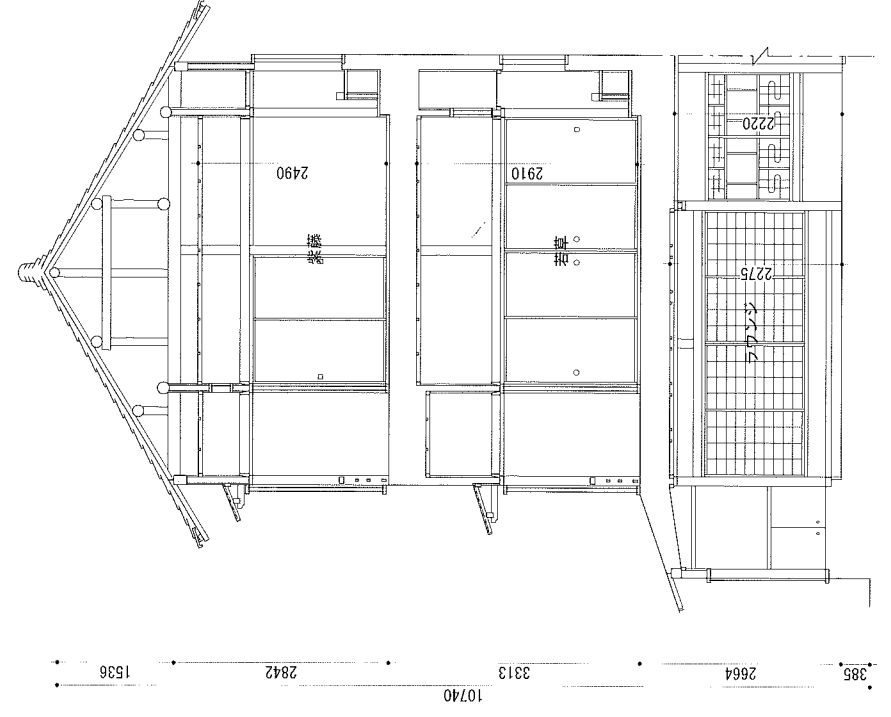
嵐溪荘緑風館 中央棟A-A' 梁間断面図 S=1/100 [mm]



嵐溪荘緑風館 中央棟B-B' 桁行断面図 S=1/100 [mm]



嵐溪荘緑風館 東棟C-C' 梁間断面図 S=1/100 [mm]



嵐溪荘緑風館 西棟D-D' 梁間断面図 S=1/100 [mm]

